



TITLE:

晩年のマルクス覚え書 (出口勇藏教授記念號)

AUTHOR(S):

田中, 真晴

---

CITATION:

田中, 真晴. 晩年のマルクス覚え書 (出口勇藏教授記念號). 經濟論叢  
1972, 109(1): 150-165

ISSUE DATE:

1972-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133448>

RIGHT:

# 經濟論叢

第109卷 第1号

## 出口勇藏教授記念號

---

献 辞	大野英二	
社会科学の「科学性」	河野健二	1
貨幣価値をめぐるリカードとマルクス	行沢健三	18
資本と分配の理論について	菱山泉	41
ルカーチとハンガリア・ソヴィエト共和国	平井俊彦	64
W. バジォットのアダム・スミス論	岸田理	85
実質費用論と機会費用論	高橋正立	108
B. B. ベルビーフロフスキー論序説	松岡保	131
晩年のマルクス覚え書	田中真晴	150

出口勇藏 教授 略歴・著作目録

---

昭和47年1月

京都大學經濟學會

## 晩年のマルクス覚え書

田 中 真 晴

### I は し が き

マルクスに関する伝記はたくさんあり、そのなかには特色のあるものがあるけれども、これこそという名著は、まだ書かれていないように思われる。伝記は人物の生涯を年代順に叙述するのが普通であるから、マルクス諸伝の終章は、マルクスの生涯の最後の時期をあつかっているのであるが、その最後の時期、マルクスの晩年あるいは老マルクスとして叙述されている時期は、おおむね、パリ・コミューンの崩壊以降、あるいは国際労働者協会の実質的解体以降、マルクスの死（1883年3月14日）にいたる、12～10年間である。しかし、晩年のマルクスに対する評価は、けっして一様ではない。1918年というはやい時期に書かれ、いまでは資料面で多くの制約が目につくにもかかわらず、すぐれたマルクス伝たることを失わない、メーリング・F. Mehring（1846-1919）の「カール・マルクス」“*Karl Marx*”の第15章（終章）は、「最後の10年間」と題されていて、「マルクスは、1873年末、インターナショナルの最後のけいれんのやんだあと、自分の仕事部屋にしりぞいた。……かれの最後の10年間は、〈緩慢な死〉だといわれてきたが、それは大きな誇張である」<sup>1)</sup>という書き出しで、始められている。カー F. H. Carr（1892～）の「カール・マルクス」“*Karl Marx—A Study in Fanaticism*”（1934）は、マルクス主義者でない著者によるマルクス伝の秀作であるが、その終章「オールド・ニック」には、「マルクスはハーグにおける犠牲の多かった勝利（インターナショナル、ハーグ大会、1872年9月、

1) フランツ・メーリング、栗原佑訳「カール・マルクス」第2巻、大月書店、昭和28年、240ページ。

……筆者)の後、10年とちょっと生きていた。しかし、かれの生涯の最後の10年間には、大して目立ったことはない。それは老衰の時期であり、不健康と無能力とが増した時期である<sup>2)</sup>と述べられている。マルクスとイギリスの労働者運動との関係をテーマにした最近の一研究書も、マルクスの「最後の12年間」について、ほぼ同様の見解をしめしている<sup>3)</sup>。多くの事実をつめこんではいるが、マルクスという生身の人間を描くことに成功しているとはいえない、東ドイツの最近の協同労作のマルクス伝<sup>4)</sup>は、やはり1871～1883年を終章としているが、病苦にもかかわらず、諸国の労働者運動への指令・忠告と「資本論」の完成とに向けられた、衰えをしらぬマルクスの知力を強調している。

わたくしは、晩年のマルクスについては、ロシア論にかぎって論考したことがある<sup>5)</sup>。それは、ロシア資本主義論史とロシア・マルクス主義の原点を究明する仕事のなかにおいてであったが、その後、マルクスのロシア論は、あるいは、マルクス、エンゲルスの世界史像や革命論の研究の重要な環として、あるいはロシア・マルクス主義がマルクスからなにを欠落させたか、の問題として、わが国のマルクス研究のひとつの焦点となってきている<sup>6)</sup>。マルクスのロシア論が、熱意を帯びてとりあげられていることの根柢には、共産主義とはなにか、という深刻な問があり、マルクスを読みなおし、マルクスの歴史認識の

2) E. H. カー、石上良平訳「カール・マルクス」未来社、昭和31年、382ページ。

3) H. Collins and C. Ahramsky, *Karl Marx and the British Labour Movement*, 1965, pp. 296-98.

4) ドイツ社会主義統一党中央委員会付属、マルクス＝レーニン研究所、ハインリヒ・ゲムコー責任編集、坂井信義訳「カール・マルクス——伝記」大月書店、昭和44年(原書1968年)、第6章。ただし、ビュール・デュラン、大塚幸男訳「人間マルクス」岩波新書、昭和46年(原書1970年)のようなのが、人間マルクスをもっともふかく描いているとは思われない。

5) 田中真晴「ロシア経済思想史の研究」ミネルヴァ書房、昭和42年、第1章第2節、マルクス、エンゲルスのロシア論、9-18ページ。この部分は、19世紀末のロシア資本主義論、「経済論叢」第89巻第1号、昭和37年1月号、に加筆したものであり、基本的な論旨に変更はない。

6) 山之内清「イギリス産業革命の史的分析」青木書店、昭和41年、第2章。同「マルクス・エンゲルスの世界史像」未来社、昭和44年、第8章。淡路憲治「マルクスの後進国革命像」未来社、昭和46年、第7、8、9章。福富正実「共同体論争と所有の原理」未来社、昭和45年、第2章その他。平田清明、社会主義における人間の再生、「潮」昭和44年、別冊春季号。同「市民社会と社会主義」岩波書店、昭和44年、第7章。同、歴史的必然と歴史的選択、「展望」昭和46年10、11、12月号。水田洋編「講座マルクス主義3、マルクス主義思想史」日本評論社、昭和45年、序章2。

深所に、すぐれて現代的な問題の鍵を見出そうとする探求がある。それだけではない。ロシア・ソビエト史研究者によるミール共同体に関する実証的研究のいちじるしい進展がみられ<sup>7)</sup>、またウェーバー研究の側からのロシア論の展開がある<sup>8)</sup>。晩年のマルクスのロシア論を考究するさいに読むべき文献の量はいちじるしく増え、論点も多岐にわたってきている。わたくしは、わたくしの論考が、それらのなかにおいて、利用されたり、叩き台とされたりして、なにほどこかの役割りを果たしたことをよろこぶとともに、論争へのいざないに応じないでいることを遺憾に思っている<sup>9)</sup>。ところで、わたくしが本稿で意図しているのは、ロシア論をもふくめて、晩年のマルクスの視圏と問題意識をより明確にし、研究をいっそう堅実な地盤のうえにおくために、文献調査をおこなうことである。晩年のマルクスが、どのような視圏を獲得しており、なにを考えていたか、多面多層的なマルクスの知的営為が、その晩年において、どのような連関にあったのか、さらに、われわれは、それをどのようなかたちにおいて、継承しうるのか、というような問題に対するひとつの基礎作業は、晩年のマルクスが書き残したものは、どれだけあるのか、またそのうち、どれだけのものがどのようなかたちで刊行されていて、われわれが読むことができるのか、をあきらかにしておくことである。

このように書くと、なにをいまさらそのようなことをする必要があるのか、マルクスの書いたものはみな翻訳されているのではないかと不審に思うひとがあるかも知れない。このような不審は、本稿の叙述自体によって解消されるであろう。

7) 浜内謙「ソビエト政治史」勁草書房、昭和37年。同「スターリン政治体制の成立、第一部」岩波書店、昭和45年。保田孝一「ロシア革命とミール共同体」御茶の水書房、昭和46年。

8) マックス・ウェーバー、林道義訳「ロシア革命論」福村出版、昭和44年。林道義「ウェーバー社会学の方法と構想」岩波書店、昭和45年、第2部。同「スターリニズムの歴史的根源」御茶の水書房、昭和46年。雀部幸隆、マックス・ウェーバーのロシア革命論、上・下、「思想」昭和44年12月、45年1月号。なお肥前栄一、シュルツェニゲヴァニッツのロシア社会論、「思想」昭和45年3月号、も同様の問題意識を宿した労作である。

9) とくに山内靖、淡路憲治両氏の労作に対する書評を約しながら、果しえなかったことをお詫びする。「社会科学の方法」誌からの、林=雀部論争への介入の要請に対しても応じえなかった。

「晩年のマルクス」は、はじめに記したように、さしあたり伝記的区分である<sup>10)</sup>。そして伝記的区分はそれ自体として、思想や理論の時期区分と一致するとはかぎらないし、「晩年のマルクス」自体のなかに、思想や理論上に微妙な変化の時点があるのではないか、という問題がある<sup>11)</sup>。さらに晩年のマルクスとエンゲルスとの関係<sup>12)</sup>など、さまざまな問題があるが、それらの問題をあつかうことは本稿の課題ではない。

「晩年のマルクス」が、みずから印刷に付した完成稿はすくない。とりわけ1870年代の半ば以後はそうである。マルクスは、パリ・コミューンのなかに未来への過渡形態を看取したと信じ、それが晩年のマルクス（パリ・コミューンのときかれは53歳であった）の始点をなすとともに、パリ・コミューンの崩壊、国際労働者協会の解体、イギリスの労働者運動の旧知たちとの決裂<sup>13)</sup>、イギリスの労働者運動に対する失望の増大<sup>14)</sup>、といった暗転がつづき、マルクスは相つぐ病苦に中断されながらも、最後の力をふりしぼって、ヨリふかく、ヨリひろい認識に到ろうとした。その努力のあとには、未完の手稿、ノート、書簡等のかたちで、残されている。ごく大ざっぱに分けると、経済学（経済理論）、恐慌の形態変化等の経済実態、ロシアとアメリカ、古代社会論、その他になるであろう。以下に紹介するのは、そのうち主として経済学とロシア論関係の資料につ

10) 伝記的区分としても、とくにマルクス・エンゲルス伝としては、エンゲルスがマンチェスターの商会から身を退いて、ロンドン北郊のマルクス家の近くに居を構え、それ以降マルクス、エンゲルスがほとんど毎日会うようになる1870年9月が重要な日付けである。リャザーノフ「マルクス・エンゲルス伝」（1923）の終章（第9章）は、この時点から筆を起している。

11) 平田清明氏は、「資本論」第1巻フランス語版が、マルクスのロシア研究の進行と密接な関係にあり、マルクスのロシア論の基準を蔵することを主張する。とすれば、ほぼ1875年ごろに、マルクスは質的な理論的深化をとげたわけである。平田清明「経済学と歴史認識」岩波書店、昭和46年、とくに469-81ページ。それとは反対に、たとえばホブズボームは、マルクスがナロードニキの見解に傾いたことを「根拠を欠いた議論」とし、マルクス主義的伝統の本流からの逸脱としている。ホブズボーム、市川泰治郎訳「共同体の経済構造」未来社、昭和44年（原書、1964）、57ページ。

12) エンゲルス研究については、杉原四郎、エンゲルス研究の動向、「思想」昭和45年3月号。同、エンゲルスの統一的全体像をもとめて、上・下、「思想」昭和45年11月、12月号。同、「共産主義の原理」小論、「現代と思想」、昭和45年10月号を参照。

13) Cf. H. Collins and C. Abramsky, *op. cit.*, Chap. XIV, XV.

14) 「イギリスの労働者階級は1848年以来、しだいに腐敗の度をふかめてきて、いまではついに大自由党の尻尾、すなわち資本家たちの党の下男 Knecht にまで、なりさがってしまった……」1878年2月11日付、マルクスの W. リープクネヒトへの手紙、MEW, Bd. 34, S. 320.

いてである。

## II 経済学関係

(1) マルクスは、1872年7月～1873年6月に、「資本論」第1巻のドイツ語第2版を分冊形式で刊行し、1871年9月～1875年11月に分冊形式で出版されたフランス語版をみずから綿密に校訂した。平田清明氏によるフランス語版の意義の主張、佐藤金三郎氏による諸調査等によって、「資本論」第1巻各版の厳密な対照がすすめられつつある<sup>15)</sup>。周知のように、第3版、第4版は、マルクス死後エンゲルスによる刊行である。

(2) 「資本論」第1巻のドイツ語第2版およびフランス語版を除けば、マルクスが書いて生前に印刷されたものは、エンゲルスの依頼に応じて、「反デューリング論」(1878)に寄せた、同書、第2篇経済学、第10章「批判的歴史」から、‘Aus der „Kritischen Geschichte“’である。エンゲルスは、1885年版の序文では、「経済学篇の第10章はマルクスが書いたものであって、わたくしはただ形式上の理由から、残念ではあったが、やむなくそれをいくらかちぢめただけである」<sup>16)</sup>と述べ、1894年版(第3版)の序文では、「最初、新聞論説としてこの章(第10章)をまとめたさいに、わたくしはやむをえずマルクスの原稿を

15) 平田清明「経済学と歴史認識」とくに第5章。佐藤金三郎、「資本論」第1巻アメリカ版のための編集指図書(マルクス)について、「経済学年報」第31集、昭和46年2月。同「資本論」第1巻第1版のマルクス自用本における書きこみについて、「経済学雑誌」第64巻第5号、昭和46年5月。山田鋭夫、マルクスにおける領有法則転回の論理、「思想」昭和46年6月。遊部久蔵、フランス語版「資本論」第1巻第1章「商品」の研究—ドイツ語本文との比較対照—、「三田学会雑誌」第64巻2・3合併号、はテーマの部分についてフランス語版に対して低い評価を下している。フランス語版の成立事情については、ア・ヴェ・ウローエヴァ、豊川卓二訳、マルクス「資本論」第1巻のフランス語版の歴史から、「社会科学」昭和41年3月号、がある。「資本論」第1巻を総括する結論部は「近代植民理論」ではなくて、「資本制の蓄積の歴史的傾向」であるはずだ、として両者の順序を入れかえるリュベール M. Rubel の主張 (*Oeuvres de Karl Marx, Économie I*, Pléiade, 1965, pp. 541, 1705-06) は、興味ぶかいが、杉原四郎氏は賛成を保留し(1866年1月—1867年9月、経済学史学会編『「資本論」の成立』岩波書店、334ページ) 平田清明氏は批判的である。『「経済学と歴史認識」461-62ページ)。しかし両氏ともリュベールの主張をたんに無根拠としているのではない。なお、Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Mit einem Geleitwort von Karl Korsch, 1969. は第2版を底本として、第3版、第4版の異文を欄外に添えている。

16) 「マルクス＝エンゲルス全集」大月書店、第20巻、9ページ。

かなりはじめなければならなかった」が、この割愛部分こそは「デューリングの主張にたいする批判よりも、経済学史についての独自の論述が主となっているような箇所」「今日でももっとも大きな、永続的な興味のある部分である」。したがって、この版では、そのような部分を「できるだけ完全に、またことばどおりに採録」し、「これに反して、もっぱらデューリング氏の諸著作だけに関係する部分は、文脈上さしつかえないかぎり省略してしまった」<sup>17)</sup>と述べている。MEW版は1894年版にもとづいている。マルクスの原稿は、MEGA, *Sonderausgabe*, 1935. (エンゲルス死後40年を記念して、反デューリング論と自然弁証法関係論稿を収む)に、Karl Marx, *Randnoten zu Dührings Kritische Geschichte der Nationalökonomie*.として載せられている(*Ibid.*, SS. 341-71)。編者註によれば、「1877年をはじめに執筆、2冊のノートの草稿ひとつと決定稿」とがあり、いずれも自筆稿。「最終稿を印刷し」草稿異文の重要なものは、H<sub>1</sub>, H<sub>2</sub> (ノート番号)として脚註に記してある(*Ibid.* S. 340)。

MEGA所収のマルクス稿と現行版(MEW, Bd. 20, SS. 210-34.)を対照すると、つぎのことがわかった。(1) マルクス稿は全体を7節にわけていたが<sup>18)</sup>、現行版では節への区分がなくなっている。(2) 現行版の書き出しのパラグラフおよび最終パラグラフはマルクス稿にはない。(3) 重商主義、ペティに関して、マルクス稿にあって、現行版にはない個所がある<sup>19)</sup>。ステュアートに関する言及がちがった場所でおこなわれている<sup>20)</sup>。経済表の説明にも異文がある。措辞

17) 同上、17ページ。

18) I. Das griechische Altertum, II. Der Merkantilismus, III. Vorgänge und Anzeichen einer rationelleren Wirtschaftslehre, Petty, Boiguillbert und Law. Wieder Petty, Locke und North und alles was sich bei Dühring von 1691 bis 1752 ereignet, David Hume, V. Die Physiokratie, No. 1, Bei-, unter- und vorläufige über das Tableau économique, No. II, Maßgebendes über das Tableau économique, Kurzer Aufschluß über das, was bei Quesnay selbst das Tableau économique bedeutet, Rückkehr zum Gewaltsmenschen Dühring, VI. Adam Smith, VII. End mit Schrecken. ナンバー IVの付号は原稿自体に欠けている。なお、MEGA版にはマルクスの草稿第1ページの写真が、MEW版には、マルクスの決定稿の第1ページの写真が添えられているが、MEWの邦訳にはない。

19) MEGA, S. 344の第1パラグラフ, S. 345の15-28行。

20) MEGAではS. 352, ロック, ノースのあとでヒュームのまえ。MEWでは重農学派のあと、MEW, Bd. 20, S. 236。



のちがいはいは全体を通して相当にある。*MEGA* 版の脚注(草稿異文)をふくめて、*MEGA* 版の価値が評価されるべきであろう。

(3) 「資本論」第2部。「資本論」第2部の諸手稿の成立時期と、諸手稿から現行版「資本論」への構成の仕方については、編者エンゲルス自身による説明が序文に書かれていて、それが一般に通用している。しかし、最近の手稿解読の進展によって、手稿の成立時期や手稿と現行版＝エンゲルス版との関係について、エンゲルスの説明とはちがったことや、エンゲルスが書いていないことが、知られるようになった。この方面での先駆的なハルトノフ「マルクス経済理論の仕上げの歴史から」Ю. Т. Харитонов, Из истории разработки марксистской экономической теории «Вопросы истории» No. 2, 1956. は、ドイツ語訳があり<sup>21)</sup>、副島種典氏による紹介と部分訳もある<sup>22)</sup>。最近のものとしてはグリゴリヤン「『資本論』第2部の手稿に関する問題によせて」С. М. Григорьян, К вопросу о рукописях II томах “Капитала” がある<sup>23)</sup>。グリゴリヤンの論文は、モスクワのマルクス・レーニン主義研究所のマルクス・エンゲルス著作部門のブレチンに載っていて、ロシア語版マルクス・エンゲルス著作集 *Сочинения К. Маркса и Ф. Энгельса* の補巻第49巻(未刊)の準備過程での報告である。第49巻に、「資本論」第2巻の手稿のうちのどれだけが収められるかはわからないが、われわれとしては、かつての「直接的生産過程の諸結果」のときのような<sup>24)</sup>、ドイツ語原文との並記掲載を願ってやまない。ドイツ語手稿の解読にもとづいてロシア語訳だけを発表するという、腹立たしくも馬鹿らしい慣習は困る。もちろん、予告されている新版 *MEGA* には全手稿原文が載るわけだが、それを待っていると、ずいぶんさきのことになりかねない。

さて、「資本論」第2巻のエンゲルス序文とグリゴリヤンの叙述とを対照し

21) J. T. Charitonow, „Aus der Geschichte der Ausarbeitung der marxistischen ökonomischen Theorie“, *Sowjetwissenschaft*, No. 6, 1956, SS. 733-47.

22) 副島種典, マルクス「資本論」第2巻について——その完成のためのエンゲルスの働きにかんするハルトノフの研究, 「経済評論」1957年4月号, 129-39ページ。

23) Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС, *Научно-информационный бюллетень сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса*, No. 19, 1970, стр. 169-76.

24) Cf. *Архив Маркса и Энгельса*, т. II (VII), 1933.

て表をつくるとつぎのごとくである。

	エンゲルス		グリゴリヤン		
	大いさ	執筆時期	大いさ	執筆時期	摘 要
第1稿	2折版150ページ	1865年または1867年	385枚	1865年	全3章をふくむ
第3稿	—	—	17枚	1867年9月	
第4稿	—	—	140枚	1868年4～5月	E, 大部分使用
第2稿	—	1870年	837枚	1868年12月～1870年7月	全3章をふくむ。 E, 約 $\frac{1}{4}$ を使用
第5稿	2折版50ページ	1877年3月以降	193枚	1877年4～10月	E, ほとんど全部を使用
第6稿	4折版17ページ	1877年10月以後、1878年7月以前	62枚	1877年11月～1878年6月	E, ほとんど全部を使用
第7稿	2折版7ページ	M筆の1878年7月2日の日付あり	23枚	(Eと同じ)	E, ほとんど全部を使用
第8稿	4折版70ページ	—	234枚	1880～81年	E, 約 $\frac{1}{4}$ を使用

表中のMはマルクス、Eはエンゲルス。エンゲルス欄の大いさのページは、もちろんマルクス手稿のノートのパージ数であるが、グリゴリヤン欄の「枚」(原文略符 枚)は、M・L研究所での解読タイプ印刷ページ数をしめすものと推定される。表中に「章」とあるのは、エンゲルスが編集のさいに篇にしたものに当たる。

「資本論」第2部の8つの手稿のうちで、ともかく全巻にわたる草稿であるのは、第1稿、第2稿であり、分量的にも他にくらべて大きい。とくに第2稿が圧倒的に大きい。他の6つの手稿はいずれも部分稿である。第2部の大綱が、「晩年」以前にできていたことが知られる。しかし他方、それら2つの稿について大きく、しかも現行版第2部第3篇の主要原稿たる第8稿の執筆が、グリゴリヤンが記しているように、1880—81年であるとする、最晩年に近いとき

まで、マルクスが経済学の中なかでもとくに理論的な部面(第2部第3篇)について、するどい思考を進めていたことが、いっそうあきらかになる<sup>25)</sup>。単純なマルクス老衰説は、こういう点に関する考察を欠いている。

ハルトノフは、エンゲルスが「資本論」第2部の編集に使用したのは、全手稿の約4/5であると記して、したがって1/5は未公開ということになる。その1/5のうちわけは、グリゴリヤンによって知られるわけで、表の摘要欄を逆に読めば、第1稿、第3稿の全部、第2稿の約1/2、第4稿、第8稿の小部分、第5稿、第6稿、第7稿の僅小部分が未公開である。第2巻手稿は、年代的に、第1～第4稿と第5～第8稿との2つのグループにわかれ、第2グループが「晩年のマルクス」に属するから、晩年のマルクスのもので、公開されていないものは、比較的わずかである。グリゴリヤンは、エンゲルスが述べている8つの手稿のほかに、M・L研究所は5つの手稿を所蔵していることを述べているが、それらは1～15枚の小稿であり、そのうちの3つは1877年執筆(いずれも第1章の手稿)であるが、それをいれてみても、量的に大した変化は起きない<sup>26)</sup>。

しかし、晩年のマルクスの手稿のほとんど全部がエンゲルスによって使用されているにしても、晩年のマルクスの理論をそのものとして知るためには、全手稿とくに、晩年以前の第1、第2手稿が原形で公開されることが必要である。

リュベール M. Rubel が、エンゲルスによる「資本論」の編集に疑問をもち、独自の手稿解説にもとづいて、「マルクスの意図にヨリ忠実である」<sup>27)</sup>ような編集をくわだてたブレイアード Pléiade 版の意義については、立ち入った検討が

25) ハルトノフも「資本論」第2部の第5～第8稿は1877-81年に書かれたとしている。Вопросы Истории, No. 2, 1956, стр. 45. MEW. の年譜 Bd. 19, S. 614 では、第8稿は1880年1～12月である。アムステルダムの社会史国際研究所の「マルクス・エンゲルス遺稿目録」では、第8稿は目録番号 A 69, エンゲルス序文と同じく1878年以後となっている。MEW. ハルトノフ、グリゴリヤンのいずれも、日付推定変更の論拠を挙げていないので、いずれが正しいのか、決定しにくい。一般に、晩年のマルクスの手稿やノート類の作成が、MEW の巻末年譜では Karl Marx, Chronik Seines Lebens in Einzeldaten, 1934. 「マルクス年譜」のそれよりも、おそい日付になっている傾向があるが、Chronik ではそれぞれの根拠がしめされているのに対して、MEW にはそれがいないため、すべて MEW のほうを正しいとしていいのか、わからない。

26) С. М. Григорьян, там же, стр. 172.

27) Oeuvres de Karl marx, Économie II, 1968, p. 502.

必要であって、それ自体別個に論じられなければならない。ここでは当面つぎの点だけを指摘しておく。リュベールは「資本論」第2部、第3部をあわせて第2巻(Band)とするのがマルクスに忠実であると考え<sup>28)</sup>、かつ第2部については、マルクスが「基礎とされねばならぬ」と注記している第2稿の構成を重んじ、エンゲルスの篇章別区分とエンゲルスによる篇章名を採らずマルクス自身のものにもとづき、叙述の重複を削って全体としてはエンゲルス版よりも小さい分量にしている。エンゲルス版が3篇21章であるのに対して、プレイヤー版では3篇13章、内容においては第2稿採用の比重がたかく、第4稿のうちではエンゲルスが採用しなかった部分を採用しているなど、ハルトノフのいう第1グループ諸稿(1870年以前)が重んじられており、とくに注記には興味ぶかいものがあるが、やはり諸手稿の集成であるから、晩年のマルクスがなにを加えなにをふかめたかを、知る資料としては限界がある。ソビエトでの研究が、エンゲルスがいかにマルクスを補足完成させたか、の視点でおこなわれているのとは反対に、リュベールはエンゲルスがいかに工合のわるいことをしてくれたか、をあきらかにしようとする点で、まさに正反対の立場であるが、ソビエトのものが、ドイツ語をロシア語にしているのと似て、フランス語に訳してしまっている点では同様に原資料的価値を減殺している。

#### (4) 「資本論」第3部

「資本論」第3部の原稿については、エンゲルスの序言によって知られていることのほか、カズィミナ И. Г. Казьмина<sup>29)</sup>、リュベール<sup>30)</sup>に伍して、佐藤金三郎氏によるマルクス「主要原稿」の厳密な調査研究がある<sup>31)</sup>。「マルクス、

28) *Ibid.*, p. 1738.

29) И. Г. Казьмина, Работа Энгельса над подготовкой к изданию третьего тома «Капитала» Маркса, *Из истории Марксизма*, 1961, стр. 376-404. 豊川卓二訳, エンゲルスの「資本論」第3巻刊行準備作業について, 「静岡大学文理学部研究報告, 社会科学」第13号, 1965年7月, 87-109ページ。

30) *Oeuvres*, t. II, p. 867ff.

31) 佐藤氏がカズィミナ説を、いっそう精細な資料検討によって支持しているところによれば、第3部「主要原稿」の執筆は、1865年1月から1866年12月末である。佐藤金三郎, 「資本論」第3部原稿について, (2), 「思想」1971年第6号。第2部の第1稿が1865年以前に書きあげられていたはずだという論証(113-15ページ)は説得的であり、本文前掲の「資本論」第2部の表で、グリゴリヤンが第1稿の執筆を1865年としているのはこの点、疑問がある。

エンゲルス遺稿目録」によると、「主要原稿」以外の第3部用手稿は、目録番号A71, A72, A73, A74, A75, A76, A77, A78, A79, A81と計10稿あり、そのうちA72, A73, A74, A75, A77, A78, A81が1870年以降執筆部分をふくみ、A81は1880—1881年稿となっているから<sup>32)</sup>、そうだとすれば、マルクスは最晩年近くまで第3部の仕事をしていたわけであるが、それらはすべて部分稿、それも剰余価値率と利潤率との関係あるいは利潤率の定式に関するものであるから、「晩年」において第3部の理論に重要な点で深化があったとは考えにくい。

### III ロシア論関係

「資本論」の全体の結構が、ほぼ1864～65年末ごろには、基本的なかたちではできていて、マルクスが「晩年」に多くの努力をはらいながらも、第2部以下は未完成のままに終わったのに対して、マルクスの本格的なロシア研究は1870年以降であり、すぐれて晩年の営為である。マルクスのロシア研究の成果と結論は、『「オナー・チェストヴェンヌイ・ザピスキ」編集部への手紙』（1877年11月ごろ執筆）、ザスーリチへの手紙の4つの「下書き」と「手紙」自体（1881年2月末—3月8日）、ダニエリソン、ゾルゲその他への手紙、エンゲルスとの共同署名の『「共産党宣言」ロシア語版序文』<sup>33)</sup>（1882年1月21日）にみられ、内容豊

32) 佐藤金三郎、アムステルダム・社会史国際研究所蔵「資本論」関係資料について、「経済学雑誌」第63巻第2号、1971年8月、10-12ページ参照。ただA78は第3部第1章、第2章をふくむ1867/1880年稿。リュベールは、プレイアード版「資本論」第3部「総過程の諸形態」を1864～1875年としている。Oeuvres, t. II, p. 865.

33) 「『共産党宣言』ロシア語版序文」のドイツ語原稿の写真版が、1948年のロシア語版にけいさいされ、その写真版は、1952年版、1956年版にも載せられている。原稿はエンゲルスの筆蹟であり、マルクス筆による若干の添削がある。淡路憲治氏は1952年版によって検討し、マルクス筆の添削は意味上の変更を生じさせるものでない、と結論している（淡路憲治、前掲書、310-13ページ）。わたくしの検討の結論も同じである。わたくしは留学中、1971年2月にアムステルダム・社会史国際研究所に通ったとき、「マルクス、エンゲルス遺稿目録」のA 114, Vorwort zur russ. Ausgabe des komm. Manifests. のフォト・コピーを借り出してみたが、これは署名だけがマルクス、エンゲルスのそれぞれの自筆であり、本文は第三者の筆で浄書されていた。内容はMEW, Bd. 19, SS. 295-96. とまったく同文であった。これは、エンゲルスがラヴローフに対して、「序文」の返送を依頼した手紙（1882年4月10日付、MEW, Bd. 35, S. 302）に対するラヴローフの返書（フランス語の短文、1882年4月17日付）に同封されていたものである。

富ながら紙量は多くない。しかしロシア論関係のマルクスのノート類はぼう大である。

「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」《Архив Маркса и Энгельса》第11巻(1948)、第12巻(1952)、第13巻(1955)は、マルクスのロシア語文献ノートを収録している(ただし、第12巻の1部はエンゲルスのノート)<sup>34)</sup>。第11巻の最初にある、チェルヌイシェフスキーの「あて名のない手紙」の手稿(マルクスがダニエリソンから送ってもらったもの)の、マルクスによるドイツ語訳(1871—73年)がロシア語にもどされているだけでなく、収録されたノートの全体が、ロシア語になっている。マルクスのノート自体は、地の文はドイツ語で、それにロシア語がまじっており、後年のノートになるほどロシア語の部分が多くなっていることが、知られる<sup>35)</sup>。ノートの性格は、丹念な抜すいノートであって、マルクス自身の書きこみ、傍注はすくない。下線や傍線はかなりある。マルクスが作成した唯一のまとまった摘要は、「アルヒーフ」第12巻所載の「1861年の改革と改革後のロシア」(ср. 3-28)であるが、この部分は、MEW, Bd. 19, SS. 407-24、(邦訳410-30ページ)にけいさいされ、ドイツ語と日本語で読めるようになった。1881年末～1882年末執筆と推定されている<sup>36)</sup>。

「アルヒーフ」第11～第13巻に収録されているものが、マルクスのロシア・ノートの全部ではないことは、第13巻の編者序文からもわかるが、現存するマルクスのロシア・ノートのどれくらいにあたるかが分らなかったが、ソビエトの比較的あたらしい一論文によると、「アルヒーフ」第11～第13巻に印刷されたのは、「保存されている抜すいのおよそ半である」<sup>37)</sup>という。そして、第13巻につづいてロシア関係に当てられると予告されていた第14巻はまだ刊行され

34) これらのノートの大ざっぱな項目については、田中真晴、前掲書、12ページ注8)を参照。

35) このことは、マルクスがロシア語で書いている語には\*印をつけるという編集方針により、収録ノートを見ることによってわかる。

36) 「マルクス・エンゲルス遺稿目録」では A. 113, Notizen über d. Landreform 1861 in Russland. (Exzerpte?), deutsch u. russisch, 21S. わたくしが借覧を求めたとき、このフォト・コピーは紛失していた。

37) К. Л. Селезнев, Русские современники о К. Марксе и Энгельсе, *История СССР*, No. 5, 1970, стр. 126.

ていず、パリ・コミュン関係文書のノート収めた第15巻(1963年)がさきに刊行された。第11～第13巻のマルクスのノートが、あわせて大判印刷716ページであるから、保存ノートが全部印刷されると印刷2,000ページを超えるはずである。

そのように、われわれが知ることができない部分が大きいのであるから、確定的なことはいえないにしても、知りうる部分(前記の「摘要」をもふくめて)についていうと、「資本論」第3部の地代論に利用するという意図を具体的にしめすようなものが、見当たらない。

つぎにマルクスのロシア語関係文献の蔵書について。東ドイツのマルクス・レーニン主義研究所刊の『マルクスとエンゲルスの蔵書』“*EX LIBRIS Karl Marx und Friedrich Engels, Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek*” 1967<sup>38)</sup>の序文に「マルクスとエンゲルス所蔵の再発見されたロシア語著作の目録は近くモスクワにおいて、(ソビエトの)マルクス・レーニン主義研究所によって公刊される」(*Ibid.* S. 20)とあるが、わたくしはその後の消息を知らない。

マルクスとロシア人との交際をあきらかにすることは、マルクスのロシア論の研究にとって、重要なことであり、この方面の出版には近時、注目すべきものがあるが、本稿のテーマからはややはずれるので注記にとどめる<sup>39)</sup>。

38) 本書の収録は504冊、そのうちには書きこみのあるものがある。本書については、杉原四郎氏による紹介がある。関西大学「経済論集」第18巻第1号、昭和43年4月号、117-24ページ。本書によって、マルクス、エンゲルス所蔵の、西欧語のロシア研究文献のすくなくとも一部について知ることができる。

39) *К. Маркс, Ф. Энгельс и революционная Россия, 1967.* は、*Переписка К. Маркса и Ф. Энгельса с русскими политическими деятелями, 1951.* にくらべてマルクス、エンゲルスとロシア人との往復書簡をより網羅的に収録している。(MEWの書簡部分は、ごく一部を除いては、第三者からのマルクス、エンゲルスに対する手紙を収録していない)。*Русские современники о К. Марксе и Ф. Энгельсе, 1969.* は、18人のロシア人によるマルクス、エンゲルスに対する回想を従来よりも完全なかたちで収録、同時代ロシア人相互間の手紙のなかでマルクス、エンゲルスおよびロシアの状態について論じている手紙、13人57通、マルクス、エンゲルスに関する14人の同時代ロシア人の論説等をおさめており、マルクス、エンゲルスとロシア人との関係の新資料を提供している。ただし、バクーニン、ネチャーエフ、トカチョフ、ミハイロフスキーの論説は収められていない。*История СССР, No. 5, 1970.* стр. 125-36の同書紹介を参照。なお、アムステルダム社会史国際研究所のRussian Series on Social History. は多くの基礎資料の印刷を期待させるが、既刊の“*Внепед.: 1873-1877*”, Vol. I, II, 1970. はマルクスと関係のふかかったラヴロフに関係している。

## IV 年代記ノート、古代社会論その他

マルクスは1870年以後、おそらく1870年代末から1880年代のはじめごろに、紀元前1世紀から1648年にいたる、ヨーロッパの政治史中心の年表を、4冊のノートに書いた<sup>40)</sup>。マルクスの遺稿中にそれらのノートを見つけたエンゲルスは、表紙に Chronolog. Auszüge I~IV と書いた。この年代記ノートは「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」第5, 6, 7, 8巻(1938, 1939, 1940, 1946年)にロシア語訳して発表された<sup>41)</sup>。そのうち、15世紀末から30年戦争にいたる時期のドイツ史に関する部分は、Marx, Engels, Lenin, Stalin, *Zur Deutschen Geschichte*, Bd. 1, 1953, SS. 285-516 に載せられていて、ドイツ語でみることができる。『アルヒーフ』の編者序言は、このノートに意味を見出そうとしていろいろのことをいっているが<sup>42)</sup>、わたくしはむしろ、マルクスが生涯の終わり近くに、一見不思議なような、一種の事件史的な年表をつくっていることの中に、晩年のマルクスの知的営為の測りがたさのごときものを、第一に感じる。

晩年のマルクスには数学ノートもある<sup>43)</sup>。しかし、かれが晩年の最後の知的エネルギーをかたむけた対象は、古代社会論であった。しかしすでに紙数も制限に近づき、また古代社会論については布村一夫氏の綿密な紹介と研究があって、わたくしはそれにつけ加えるべきものをもたない<sup>44)</sup>。マルクスは1879年か

40) 「アルヒーフ」第5巻の編者序言は、ノートが1870年代末〜1880年代はじめに書かれたと推定 (*Там же*, cр. iv), MEW, Bd. 19. の巻末年譜では1881年末〜1882年末 (SS. 621-22) となっている。MEW その他、ふつうこの年代記ノートの範囲を、紀元1世紀〜17世紀中葉としているが、じっさいには紀元前1世紀から、である。

41) 香山陽平、マルクスの手稿 Chronologische Auszüge について、「歴史学研究」第146号、昭和25年7月、44-47ページは、「アルヒーフ」の序文に拠る紹介である。マルクスの年代記ノート作成の主たる典拠は、F. C. Schlosser, *Weltgeschichte für das deutsche Volk*, Bd. 1-18, 他に C. Botta, *Histoire des peuples d'Italie*, t. 1, 2, 3, 1825. (この書物は前記 EX LIBRIS 所収, No. 61 である) その他であり、ロシア史もふくんでいる。

42) 1870年代から1882年にいたるマルクスの数学研究とノートについては、マルクス「数学に関する遺稿」玉木英彦、今野武雄訳、岩波書店、昭和24年を参照。数学にかんするマルクスの手記は全部で900ページにのぼるという (同書91ページ)。この書物のマルクス稿の原典は、ロシア語版「マルクス主義の旗の下に」1933年第1号所載のマルクス稿のロシア語訳である。(同書91, 207ページ参照)。



ら1883年の死にいたるまでのあいだに、「共同体的土地所有ノート」(コヴァレフスキーより)、「インド史年表」,「古代社会ノート」「メーソ・ノート」「フィア・ノート」「ラボック・ノート」「マニィ・ノート」をつくった<sup>43)</sup>。その他にもまだノート類があるらしい。それらにおいてとくに重要なのは、コヴァレフスキーとモルガンである。そして古代社会研究は、インド、ジャワ等の、いわば同時代に存在する「古代」の研究をふくんでいる。古代社会論とロシア社会論とが、共同体論を軸にして密接に関連していたことは、ザスーリチへの手紙の「下書き」からも、すでによく知られているところである。

以上、「晩年のマルクス」の書き残したものについて、若干の資料管見をおこなった。それは、晩年のマルクスの視圏を知るためのひとつの仕方での覚え書きである。晩年のマルクスは円熟期というような言葉であらわせるものではない。知的諸営為は、ばらばらではない。しかし、たとえば、すべてが「資本論」の完成という一点にむけて、目的合理的に組織的にすすめられていた、とは到底いえない。マルクス自身も、「資本論」のために必要な廻り道をしているのだ、と語ったばあいがあった<sup>45)</sup>。しかしエンゲルスが、マルクスの遺稿を

- 43) 布村一夫、老マルクス—遺稿「共同体的土地所有ノート」をめぐって—「歴史評論」第220号、昭和43年12月号。同、マルクスの原始人、「歴史評論」第198号、昭和43年10月。同「家族の起源」をめぐって、「歴史評論」第242号、昭和45年9月。エム・コヴァレフスキー、布村一夫訳・解説、マルクスとの出会い、「歴史評論」第209号、昭和43年9月、等。ほかにガマユノフ、福富正実訳、マルクス・インド共同体研究ノートについて、「現代の理論」第96号、昭和47年1月、が参照すべきである。
- 44) 布村一夫氏の前掲、老マルクス、を参照。「古代社会ノート」は、「マルクス、エンゲルス・アルヒーフ」第9巻(1941)所載の、モルガン「古代社会」のマルクスの抄録のロシア語版から、布村氏によって翻訳され、解説をつけられている。合同出版社、昭和37年。
- 45) ロシア語の文献資料が、「資本論」の仕事をおくらせている、という考えは、マルクス夫人をはじめ、マルクスの近辺のひとたちが等しくいっていたところであつたらしい。コヴァレフスキー、マルクスとの出会い、前掲書、40ページを参照。マルクス自身、1879年4月10日のダニエルソンへの手紙のなかで、「資本論」第2巻(これは第2部と第3部の両者をふくむとみられる、田中)の刊行は、ドイツの現在の厳格な制度がつづくかぎり、不可能であろうという報せを受けたが、「うちあけていえば、それはわたくしをすこしも困惑させない」なぜなら「第1に、現在のイギリスの産業恐慌が頂点に達しないうちは、わたくしは決して第2巻を公刊しないでしょう。……第2には、ロシアばかりでなくアメリカその他からもわたくしが受取ったばう大な資料が、さいわいにも、『公表するために研究に結着をつけないで』研究を続行する『口実』Vorwandを与えてもいます」と述べている。マルクスがあげている第3の理由は、医者からの忠告である。MEW, Bd. 34 SS. 370-72. 岡崎次郎訳「資本論」法政大学出版局、昭和42年、289-92ページ。ただし、マルクスのいう「口実」は、じっさいには微妙で深刻のように思われる。マルクスはエンゲルスに対して「資本論」の進行について話さなかった。

しらべてゆくにしたがって、「資本論」手稿自体の草稿的性格と、他方では「資本論」に組みこみようのない膨大なノート類が見出されていった<sup>46)</sup>。たしかにそれらはたんにばらばらではない。晩年において、マルクスの知的営為を基底において動かしていたのは、やはり Kommunismus の理念である。そしてそれがあるがためにこそ、はるかなる人類史の原点への遡及やロシアの研究がおこなわれ、「資本論」もあった、といえよう。しかし、それらは、限られた人生の時間に成就すべき知的営為としては、緊張関係の面をも宿さずにはすまなかったのである。晩年のマルクスの知的営為の理解は、そうした一種の多面多層的な、アンバランスと緊張関係を、そのものとして認めることから始められねばならないと思われるのである。

〔追記〕(1) 本稿は、経済原論研究会昭和46年12月例会において報告した素稿に加筆修正したものである。研究会およびその後において、杉原四郎、佐藤金三郎氏から教示されたところがある。

(2) マルクス（とエンゲルス）のロシア語文献蔵書については、ニコラエフスキーの論文（1929年）がある。本稿執筆までには読みえなかったが、経済論叢本号所載の松岡保氏の論文にそれが紹介されているから参照されたい。

46) マルクス死後の、エンゲルスの諸書簡の「資本論」に関する部分を読んでみると、エンゲルスの一種の失望化が読みとれる。1883年6月26日のゾルゲへの手紙には「もしアメリカやロシアの資料（ロシアの統計だけでも2立方メートル以上の書物だ）がなかったとしたら、第2巻はずっと以前に印刷されていたであろう。これらの細目研究 Detailstudien がマルクスを多年にわたってひきとめた」といいつつも、それらのなかに「第2巻の注として利用されうる傍注をふくんでいるであろう書きぬき」の存在を予想しているが、（前掲書、328ページ）、1884年1月28日のラヴローフへの手紙になると、「ロシアや合衆国に関する諸書からの書きぬき……」は「第3巻（第3部）のためにどこまで利用できるかわかりません。おそらくは、これらを集めて独立の一巻にまとめる方がよいでしょう。これらを『資本論』に組み入れる困難があまり大きければ、きっとそうなることになるでしょう」（前掲書、332ページ）と書いている。